



津波だ！いなむらの火をけすな

①

脚本
画

桜井信夫
藤本四郎

海辺の村です。

それは、江戸時代の末のこと、十一月のはじめ、ある日の夕方でした。

紀州和歌山の広村では、秋の取り入れが終わり、田んぼには、いくつもの

いなむらが、ならんでいました。

村人①

「米がたくさん取れたし、いいわらも

残ったし、ありがたい、ありがたい。」

村人たちは、こういって、喜びました。

かり取ったあとの、いねのわらは、

大切な使い道があつて、たばにして、

高く積み上げておきます。これが、

「いなむら」です。

そして村人たちは、そろそろ、

冬の準備にとりかかっています。

(少しの間)

―ぬきながら―

―ごおーつ

演出ノート

十一月のはじめ
旧暦の十一月
五日。現在の
十二月二十四
日にあたる。
紀州和歌山の広村
現在の和歌山
県広川町。

地鳴りの音



②

地鳴りがして、大地が、家が、はげしく
ゆれ動いたのです。

―上下左右に画面をゆすりながら―

村人① 「おおっ、地震だ！ 大地震だ！」

村人たちは、家の外にとび出しました。

子ども① 「きやーっ。」

子ども② 「こわいよう。」

子どもたちは、親にしがみつきました。

(少しの間)

かべがくずれ、かたむいた家から、

けむりのように、ほこりがまい上がりました。

―さつとぬく―

演出ノート

地震のようす

驚きながら

脚本・桜井信夫 (さくらのぶお)

1931年、東京に生まれる。国学院大学文学部卒業。
日本児童文芸家協会、日本民話の会会員。

画・藤本四郎 (ふじもとしろ)

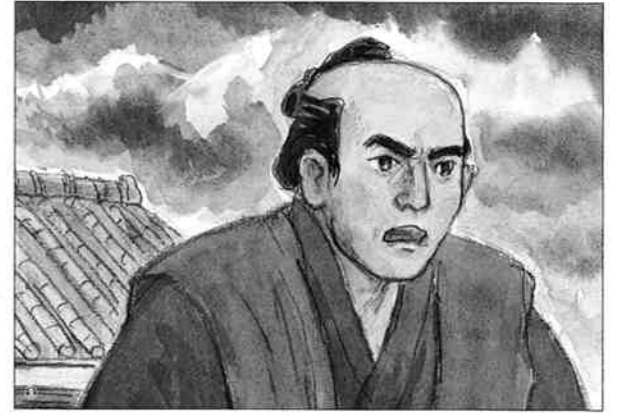
1942年、福岡県に生まれる。虫プロダクション所属
等を経て、フリーの画家になる。日本児童出版美術
家連盟会員。

津波だ！いなむらの火をけすな

2005年3月25日発行

16画面

監修 内閣府(防災担当)
編集・発行 (財)都市防災研究所
東京都千代田区丸の内1-4-2
東銀ビル5階526 (〒100-0005)
TEL 03-5218-0880
http://www.udri.net
企画 幸田真希(聖徳大学短期大学部教授)
児島正(株式会社損保ジャパン)
編集協力 山下真里子
製版・印刷 小宮山印刷株式会社



③

ひろむら 広村をおさめる庄屋として、むらびと 村人に
したわれている浜口儀兵衛も、かぞく 家族と
いっしょに家の外に出ました。

儀兵衛 「わが家は、だいじょうぶだが、

むらびと 村人たちは、無事だろうか……。」

そら 空には、黒い雲と白い雲とが、あやしく
い 入りまじって広がり、とお 遠くの雲を
き 切りさくように、するどい光が走りまわりました。

しかも、その遠い海のむこうから、

ドドン ドドン ドドン

たいほう 大砲がとどろくような音が、き 聞こえて

きたのでした。

儀兵衛

「これは、おそろしいことになる……。」

—三分の一ぬく—

儀兵衛 儀兵衛は家族に、

「いますぐ、おか 丘の上、いっほんまつ 一本松から

ひろはちまんじんじや 広八幡神社のほうへ、ひなんしなさい。」

—残りを全部ぬきながら—

と命じて、じぶん 自分は家の中に入りました。

演出ノート

庄屋 江戸時代に領主に命じられ、村を治める仕事をした者。

津波の前兆

不安そうにつぶやく

きつぱりと

津波だ！ いなむらの火をけすな



儀兵衛の妻

「何をなさるのでですか。」

儀兵衛は、たいまつに火をつけながら、

「津波だ。」

まもなく、津波がおしよせてくる。

村じゆうに、危険を知らせて歩く

間はない。

田んぼのいなむらに、火をつけて、

合図するのだ。」

—さつとぬく—

④

演出ノート

おどろいて



⑤

儀兵衛は、走りました。

いなむらのひとつに、火をつけます。

よくかわいているいなむらは、ぽつと

燃え上がりました。

—半分ぬく—

次から次へ、次の田んぼへ。

儀兵衛は、走って走って……。

「みんな、早く集まってこいよ。

そして、丘へひなんするのだ。」

—全部ぬく—



⑥

村人①

「庄屋さまの所が、火事だぞ。」

村人②

「庄屋さまに、何かあったら大変だ。」

村人③

「それ、火をけしにいけ。」

村人たちが、すぐさま、集まってきました。

こんな時には、村じゅうひとり残らず、

火けしに、加わることになっていたのです。

若者たち

「庄屋さまあ。」

「ぬきながらー」

演出ノート

あわてて

さげび声



⑦

まっ先さきにやってきた若者わかものたちが、火ひを

けそうとすると、儀兵衛ぎへえがおしとどめました。

儀兵衛なみ

「津波だ！ いなむらの火ひをけすな。」

若者たち

「庄屋しょうやさま！ どうしてですか。」

儀兵衛

「津波つなみだ。津波つなみがくる。」

村むらのみんなが、集あつまってきたかどうか、

たしかめるのだ。

そして、一本松いっほんまつから、

ひろはちまんじんじや
広八幡神社ひろはちまんじんじやのほうへ、

みんなをひなんさせるのだ。」

若者たち

「はい、庄屋しょうやさま。」

— 少しずつぬきながら —

こうして村人むらびとたちが、高たかい所ところに

ひなんした時とき、

儀兵衛

「あれを見ろ！」

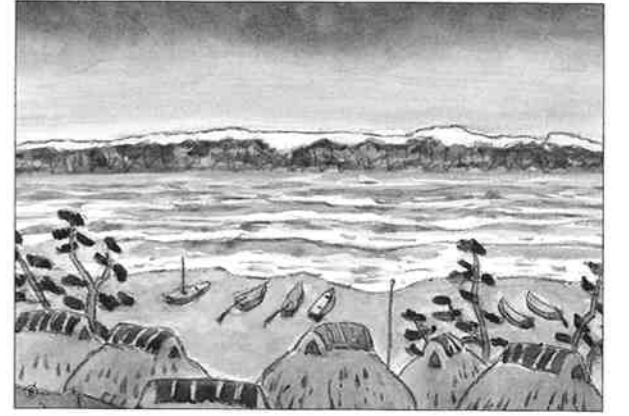
— さつとぬく —

演出ノート

必死にとめる

訳がわからず

大きな声で



⑧

儀兵衛が、海のむこうを指さしました。
村人たち 「なんだろう！」

村人たちは、おそろしいものを見ました。
まさに、暗くなりかけた沖の海に、
長く黒い帯が広がり、
こちらに、ぐんぐんせまってくる。

どどどどうん

村人① 「津波だ！」
村人② 「津波がくる！」

ーぬきながらー

ぐううおーん

演出ノート

黒い帯
この津波は、
夕方の逆光で
黒く見えてい
たが、一般に
は波頭が白く
見える。

大津波がせまる音

さげび声

村が波にのみこ
まれていく音



⑨

人々は、思わず身ぶるいしました。

海辺の村が、水けむりとともに、津波に
おそわれたのです。

村のすべてのものが、さかまく波に
のみこまれ、すがたを失っていきました。

(少しの間)

つい先ほどまで、津波がくることを

知らずに、あそこにいたのだと、村人たちは
気づきました。

村人たち 「おう、おそろしいことだ。」

時をおいて、津波は二度、三度と、
おそつてきました。

ーぬくー



⑩

村人①たちは、ずらりと、儀兵衛の前に

ひざまずいて、頭を下げました。

村人①

「おかげさまで、命が助かりました。」

村人②

「庄屋さん、ありがとうございます。」

儀兵衛は、うなずきながら、いいました。

儀兵衛

「浜口の家には、

大地震のあとには、津波がくる

という、いい伝えがあつてな。

とつさに、それを思い起こした。

「ご先祖さまの、言葉のおかげだ。」

「ぬく」

演出ノート

感謝をこめて

ゆっくりと
さすように



11

儀兵衛は、若者たちを引きつれて、

となり村へいき、たくわえ米を

借りてきました。

そして、おかみさんたちが、米をたき、

にぎり飯をつくりました。

儀兵衛

「さあ、これを食べて元気を出さない。」

儀兵衛が、先頭に立って、みんなに配って

歩きました。

「ぬくー」



12

やがて、余震が続くなか、

あれはてた村に、いくつもの仮小屋が、
つくられました。

村人たちが、立ち直りの一歩を

ふみだしたのです。

ところが、津波によって、何もかも

失ってしまったある村人は、儀兵衛に、

「もう、広村には、住んでいられません。

働き口をさがしに、よその村へ

うつろうと思います。」

また、ある村人は、

「またいつか、津波がくるかもしれないと

思うと、こわくてなりません。

もつと、安全な所へいきます。」

と、なみだながらに、うったえました。

ーぬくー



13

儀兵衛は、浜辺によせる波を

見つめていました。

天洲ヶ浜と、美しく名づけられたこの浜辺。

「ここに、津波をふせぐ堤防をつくらう。

村人に働いてもらえば、それが

働き口になる。

ふるさとが、よみがえるのだ。」

儀兵衛は、ひとり、うなずきました。

浜口家では、むかしから、銚子で

しょうゆをつくり、江戸で大きな商売を

しています。

「働く人の給料や、堤防づくりのすべての

お金を出すと、大金が必要だが、

なんと少しでも、やりぬこう。」

と、かたく決心しました。

ーぬー

演出ノート

決心して

銚子
現在の千葉県
銚子市。



⑭

さつそく、工事が始まりました。

儀兵衛が調べたところ、広村は、

ここ五百年の間に、ほぼ百年ごとに、

大津波におそわれていることが、

わかりました。

むかしの津波のようす、こんどの津波の

ようすをもとに、儀兵衛が堤防の設計をし、

工事のさしずをしました。

村人たちは、よく働きました。

「村を守るために、がんばろう。」

「男も女も、働けば、すぐにお金が

もらえる。

ありがたい、ありがたい。」

「田畑の仕事が、いそがしくなれば、

工事のほうは、休みになるとか。」

「こんなに、働きがいのあることはない。」

「ぬく」



15

四年の月日、多くの人々の力、それに
 大金をかけて、りっぱな堤防が完成しました。

(少しの間)

いなむらの火が燃えた時の、

安政南海地震津波から九十二年後、

昭和南海地震の時には、予想したように、

大きな津波がおそってきました。

しかし、堤防はゆるぐことなく、人々を

津波から守りました。

—ぬく—

防災教育としての「稲むらの火」

1896年、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）は、日本の神の概念は諸外国のそれとは著しく異なっていることを述べた作品「A Living God」を著しました。その中に、稲むらに火を放って村人を導き、その命を津波から救い、神として祀られた濱口五兵衛という人物の活躍についてのエピソードがあります。また、この作品をもとに、教員であった中井常蔵は文部省（当時）の小学国語読本の公募に応じ、それは「稲むらの火」として、昭和12年から22年まで、読本に掲載されました。濱口梧陵をモデルにしたこの二つの作品によって、津波の危険が防災知識として人々の記憶に残りました。

「地震のあとは津波を心配せよ」、「突然波が引いたら津波を心配せよ」と、防災教訓のエッセンスだけを連呼しても人の記憶に留まる時間は短いでしょう。人々の日常の生活に結びついた防災という位置付けがあつてこそ、防災は前向きな価値を持ちます。この考えは、政府の中央防災会議「民間と市場の力を活かした防災力向上に関する専門調査会」においても繰り返し強調されています。

この紙芝居は、津波後の堤防造りまでの出来事が語られ、住民の手による防災と復興という視点からも、意義のある教材になると言えるでしょう。



和歌山県広川町の堤防では、毎年十一月に、津波まつりがおこなわれます。

①「いなむらの火をわすれません。」

②「堤防づくり、ありがとうございます。」

子どもたちがそれぞれに、一ふくろずつの土を堤防に運び、積み上げていります。

そして、

「みんな、ふるさとを守ります。」

と、防災の心をあらたにするのです。

(おわり)

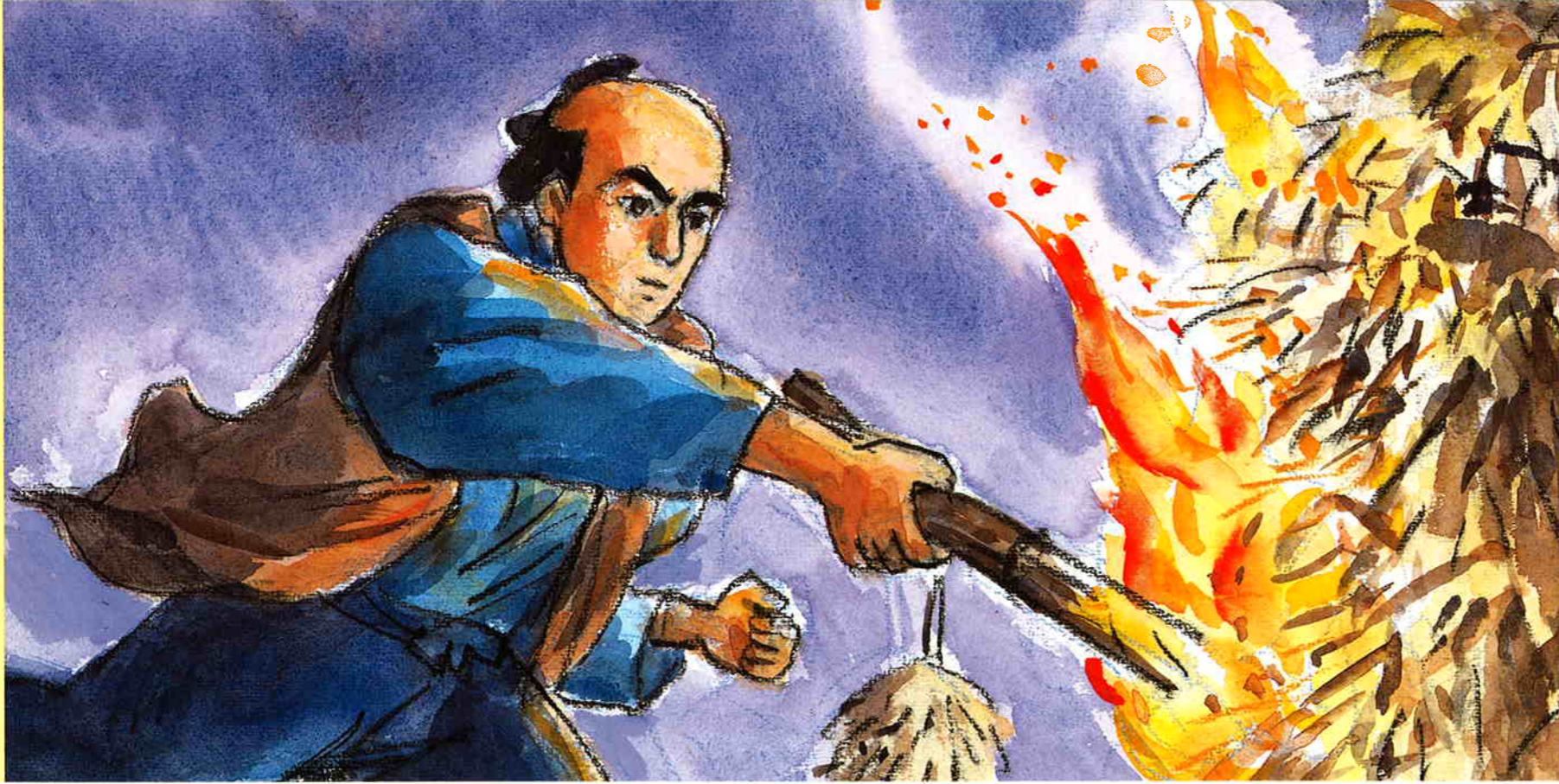
1854年、安政南海地震津波が広村（現在の和歌山県広川町）を襲いました。この大津波が襲った際、濱口梧陵（当時儀兵衛、35才）は暗闇の中で逃げ遅れていた村人を、「稲むら」に火を放って高台にある広八幡神社の境内に導き、多くの命を救いました。その後、百年後に再来するであろう津波に備え、巨額の私財を投じ、海岸に高さ約5m、長さ約600mの広村堤防（防波堤）を築き、その海側に、大量の松を山から移植し強固なものにしました。約4年間にわたるこの大工事に村人を雇用することで、津波で荒廃した村からの離散を防いだとのこと。

そして92年後、昭和21年に昭和南海地震が発生し、高さ4～5mの大津波が広村を襲いましたが、梧陵が築いた広村堤防は、村の居住地区の大部分を津波から守ったのです。

この紙芝居は、ラフカディオ・ハーンの「A Living God」や中井常蔵の「稲むらの火」を参考にしながら、また防災教育の教材としてこのエピソードが使われることを念頭に置きながら、地震の揺れが激しかったこと、堤防を築いたこと、地元ではいまでも津波まつりを行っていることなど、できるだけ事実に基づくように配慮して編集しました。

作品としての構成の上で、史実と少し異なる部分がありますが、わかりやすい防災の啓発普及教材として活用されることを願っております。

津波だ！いなむらの火をけすな



つなみ
津波だ！いなむらの火をけすな

脚本／桜井信夫 画／藤本四郎
監修／内閣府(防災担当)
編集・発行／(財)都市防災研究所

江戸時代の末、地震による大津波が紀州和歌山の広村（現在の和歌山県広川町）を襲いました。濱口梧陵（当時、儀兵衛）は、稲むらに火をつけて村人を高台に導き、多くの命を救います。その後、私財を費やし、村人と協力して防波堤を造りました。

（16画面）